

＜悪魔と天使の法学入門第6話＞裁判員制度と国民の法意識

著者	星野 豊
雑誌名	月刊高校教育
巻	40
号	12
ページ	94-95
発行年	2007-09
URL	http://hdl.handle.net/2241/105953

【悪魔】 あと何年かで施行される裁判員制度については、いろいろな評価が聞こえてきますが、本当に必要なものなのですか？ かなりの手間がかかることは間違いないようですが。

【天使】 裁判員制度は、これまで法律の専門家である裁判官の手に完全に委ねられていた裁判における判断過程に、国民を直接参加させることによって、国民の法意識を高めていくことが究極の目的だ。日本が法治国家である以上、法と正義の実現過程である裁判に対して、国民の多くが無関心であることは、決して望ましいことではない。だから、ある程度社会的なコストがかかったとしても、司法制度を根本的に改革するためには必要不可欠の制度の一つだと言えるだろう。

【悪魔】 でも、国民を裁判に直接参加させて判断までさせることは、コストというよりリスクを伴うものではないですか？ 普通の人は普段の生活の中で法律の規制があることを常識として知ってはいても、細かい規則や自分の知らない事柄に関する制度はあまり詳しくはないで

悪魔と天使の法学入門

筑波大学准教授 星野 豊

第6話

裁判員制度と国民の法意識

しょう。まして、裁判の手続に関する細かな規則は、説明されてもよく分からないかもしれないかもしれません。そんな状態の人たちを判断に参加させて、本当に大丈夫なのですか？

【天使】 そのために、法律の専門家である裁判官が裁判員と共に判断を行い、適正な手続に則ったうえで適法かつ常識的な判断を下す、という構造になっているわけだ。それに、細かな法令上の規制について知っていなければ判断できない事件は、割合としてそれ程多くはないし、裁判員が説明を受けて考える時間は十分確保されるはずだから、そのような懸念は問題とするに足りない。

【悪魔】 その場で説明を受ければ理解できるはずだ、というのは、かなり楽観的な見方ですね。説明を受けて分からなかったり納得できなかったりしたときに、それを全員の前で正直に言ってさらに説明を求めることができる人は、相当優れた能力を持った人だと思いますよ。それに、現実の裁判の中で、裁判員がじっくり考える時間的な余裕がどこまであるかも、何とも

言えない気がします。

裁判は当事者にとっては時間がかかるというイメージが強いですが、裁判所の側から見れば、大量の事件を抱えている中で、できるだけ早く、それも他と比べて不公平のないように判断する必要があるわけですから、一つ一つの事件にかける時間は、事実上制限されることになるでしょう。

そうすると、裁判がどのように行われるかは、結局は裁判長がどのように訴訟を指揮するかにかかってくるわけで、実はこれまでと全然変わらないような気がするんですよね。

【天使】 確かに、裁判員制度は、裁判官にとって、事件ごとに入れ替わる裁判員に対して、手続や判例のかなり初歩的な部分から説明しなければならぬ、という負担をかけるわりに、従来に比して飛躍的な発展が確実に見込まれるわけではない。

しかしながら、日本の裁判官がこれまで黙々とこなしてきたところの、極めて地味で根気の必要な判断過程を、国民に事実上公開するという意味では、国民の裁判に対するイメージを変



革させ、ひいては国民の法意識を高める決定的な要因になる可能性が極めて大きいものと言えるはずだ。

【悪魔】 裁判官が努力していることのアピールのためだけに裁判員制度が行われるのだとしたら、裁判の当事者を犠牲にすることになりかねませんね。それに、裁判員の側にとっても、自分から希望して就任するのならともかく、望まない時期に普段の仕事から突然切り離されて、他人の裁判に関わらなければならないというのは、商売をしている人たちを例に挙げるまでもなく、損失が大き過ぎるでしょう。法律家は裁判を中心に世界観を作り上げているところがありますが、世の中のほとんどの人たちにとっては、裁判は「異常事態」なわけで、お世辞にも「身近に感じ」たくはないものですよ。

本当に「国民の法意識」を高めたいのであれば、大人になってから急に本物の裁判に引っ張り込むのではなくて、子どもの時から、正しいこととそうでないことの差がどこにあるのかを、学校や家庭で考えさせていくことが、時間はかかって必要なんじゃないでしょうかねえ。